

# 大学教養科目における英語による「平和科目」の提供

達 川 奎 三

広島大学外国語教育研究センター

## 1. はじめに

社会のグローバル化が急速に進み、激しい変化や新しい環境に対応できる人材の育成が求められて久しい。文部科学省（2008）によると、いわゆるグローバル人材に求められる資質には、(1)「語学力・コミュニケーション能力」(2)「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」(3)「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の3要素が必要であるとしている。しかしながら、(2)(3)の要素を外国語である英語を用いて育成するのは容易なことではない。日本国内を見渡すと、入学から卒業までの全てを、英語というツールで学ぶ大学や学部・学科・研究科が創設され、社会から高い評価を受けている。本論考は、このような時代の流れを受け、筆者が勤務校で提供した英語での教養科目「Global Issues Towards Peace B」の教育実践の紹介と受講学生の受け止め（評価）を報告するものである。

## 2. 高等教育における英語教育について

高等教育において、入学から卒業までの全て（またはほとんど）のコースを、英語をツールとして学ぶ大学や学部・学科が創設され、社会から高い評価を受けている。例えば、国際教養大学国際教養学部（秋田県）、同志社大学国際専修コース、立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部、中央大学総合政策学部などが挙げられる。また、これらの多くの大学では、在学中の海外留学やインターンシップも学生に求めているようである。

高等教育における英語教育を概観してみると、従来の一般教養英語授業（English for General Purposes）に加え、ESP（English for Specific Purposes）、EAP（English for Academic Purposes）、CLIL（Content and Language Integrated Learning）などの考え方がある。ESPについて、寺内（2000）は「学問的背景や職業などの固有のニーズを持つことにより区別された同質性が認められ、その専門領域において職業上の目的を達成するために形成された集団である『ディスコース・コミュニティ』の内外において、明確かつ具体的な目的をもって英語を使用するための英語研究、およびその英語教育」と定義している。さらにESPの基本的特徴として、「English for General Purposesとは違った教授法を使えること」「学習者は多くの場合成人であること」「学習のための動機づけの意識が高く目的がはっきりしていること」「一般的にクラスサイズが比較的小さいこと」「本物らしい（authentic）素材を使用すること」「コースの目的にあった教室内活動を、学習者が自分の学習スタイルや学習段階について自ら責任を持って行う自律学習を奨励すること」などを挙げている。他方、EAPについては、笹島（2003）は「ESPの下位分類の用語で、学術あるいは研究目的のための英語研究および英語教育」ととし、「EAPは英語を母語としない学習者にとって特に有効であり、世界中の多くの大学で留学生を対象にEAPコースが設置されている」と説明している。具体的なコース内容としては、スタディ・スキル（study skills）、アカデミック・リーディング（academic reading）、アカデミック・ライティング（academic writing）、ノートの取り方（note-taking）、

プレゼンテーションの仕方 (making a presentation) などを紹介している。そして、CLIL については「教科科目などの内容とことばを統合した学習」(笹島 2011) のことで、近年中等学校教育でも注目が増している。もう少し説明を加えるならば、CLIL とは「内容 (content) に関連して思考 (cognition) しながら、学習者同士で目標言語を使うことでコミュニケーション能力 (communication) を高め、多様な社会で生活していく上での知識や技能 (culture) を学ぶこと」とまとめることができる。さらに、笹島 (2011 p.14) は以下のような図を示し、CLIL には「内容の学習」「ことばの学習」「学習スキル」の3つの目標が必要だとしている。



図1 CLIL のおける3つの目標

本稿で扱う「平和科目 Global Issues Towards Peace B」は、学内では「教養科目」という位置づけであり、受講学生も教授者も「平和学」などを専門としておらず ESP の範疇に入れるのは適切でない。また、受講生に外国語でのプレゼンテーションやエッセイ・ライティングなどを多く求めるので EAP の範疇に入るであろう。さらに、平和を構築するための諸課題 (= 内容の学習) を、外国語で展開し (= ことばの学習)、自分の主張に必要な情報を主体的に集め、相手に分かり易く発信する (= 学習スキル) などを目指した点では CLIL の実践と考えても良いであろう。

### 3. 広島大学における「平和科目」実施に至る経緯について

広島大学での全学選択必修科目である「平和科目」は平成 2011 年度から始まり、2017 年度で 7 年目を迎えた。「平和科目」は、戦争、原爆、貧困、飢餓、人口増加、環境など極めて多様な観点から学生に「平和を考える場」を提供し、寛容と共生の心を養い、国際平和を考えることにつなげたい、また、絶えず「平和」について考えることを通じて豊かな人間性を学生たちの間に培っていきたい、との強い思いから出発した。それは被爆地「ヒロシマ」に開学し、「自由で平和な一つの大学」を建学の精神として掲げる広島大学の個性の一つであり、被爆地にある広島大学の使命であると考えたからである (2011 年 1 月 19 日「平和レポート優秀表彰式」での浅原利正学長挨拶、及び『広島大学だより』第 10 号)。(なお、「平和レポート」は「平和科目」が開設・提供される以前の学生に課されていたレポートである。)

各教員の協力により、当初は 22 科目であった平和科目も、2017 年度には 29 科目に拡大し、より多様な観点から「平和を考える場」を学生へ提供することができつつある。(詳細については広島大学公式サイト「平成 29 年度に開講する平和科目一覧」を参照のこと。<https://www.hiroshima-u.ac.jp/peace/>)

hiroshima-u.ac.jp/system/files/79440/H29heiwakamoku.pdf)。本稿で報告する「Global Issues Towards Peace B」は、学内の各方面からの要望を受け、2017 年度に提供を開始した新設科目である。

他方、国内外の多くの大学において、英語（のみ）で取得できる学士や学位コースが増大する大きな流れがある。広島大学においては、2014 年度に採択された SGU（スーパーグローバル大学創成支援）事業（タイプ A トップ型）調書の中で、各学部・研究科で英語のみで卒業・修了できるコースを少なくとも 1 つは設けることとしており、2018 年度 4 月にスタートする総合科学部国際共創学科（定員 40 名）は、言わばそのトップランナーとしての役割を担うものであり、英語で提供する「平和科目」を必修科目としたことは時代の必然とも言えるであろう。

## 4. 「Global Issues Towards Peace B」について

### 4.1. コースシラバス（授業概要）

広島大学の学生が参照するサイト「もみじ」には、「Global Issues Towards Peace B」について、以下のようなシラバスが示されている。本稿の関係部分だけを抜粋することとする。（下線、強調は筆者による）

年度：2017 年度      開講部局：教養教育      科目区分：平和科目

授業科目名：Global Issues Towards Peace B

開講キャンパス：東広島      開設期：1 年次生      前期：2 ターム（計 8 週間）

授業の方法：講義・演習中心、ディスカッション、学生の発表、平和モニュメント見学

単位：2      使用言語：英語      学修の段階：3（中級レベル）

学問分野（分野）：社会人基礎      学問分野（分科）：平和教育

授業のキーワード：「平和」「国際協力（協調）」「人権（問題）」「共存社会」

授業の目標・概要等：グローバル時代における「共存社会」を考え、行動するための基本的な知識や問題意識を身に付けるとともに、それらを英語で理解・発信する力を養う。具体的には、以下の 3 点を扱う。(1) 平和な共存社会を実現するために、人類として乗り越え、解決すべき世界共通の諸問題 (2) 戦争・紛争が起こることによる人々の生活や心への影響 (3) 「人権」を守り、「共存社会」を構築することに努力した人物や団体。

フィールドワーク：指定された研修地の訪問の後、課題レポートの提出（英語で）

教科書・参考書等：『*Global Issues Towards Peace* DVD で学ぶ共存社会—グローバル時代を考える』 Keiso Tatsukawa, Walter Davies, Kenji Tagashira, Goro Yamamoto, Fuyuko Takita 南雲堂, 2014 年 ISBN978-4-523-17741-8 C0082

予習・復習へのアドバイス：授業に参加する前に、教科書にある指定タスクをきちんとこなし、足りない情報や疑問点については、各自がインターネットや書籍などで確認すること。

履修上の注意（受講条件等）：授業は基本的に英語で行います。グローバル化が進む社会で必要とされる基本知識や問題意識とともに、それらを英語で理解し、発信・議論するための英語力を養いたい学生の受講を希望します。英語力は英検 2 級、TOEIC (R) テスト 550 点以上を要求します。受講定員は 20 名程度とし、定員を超えた場合は Global Peace Leadership プログラムの学生を優先します。

成績評価の基準等：毎時の授業（討論）参加態度や発表の内容（70%）、課題レポート（30%）などを総合的に評価する。平和モニュメント見学レポートの提出は単位認定の必須条件で

す。なお、レポートは英語で作成します。

メッセージ：本授業を通して、英語で他者と積極的に意思疎通を図り、平和へのメッセージを発信してみたいという気持ちを育んでください。

また、初回の授業で表1の授業シラバスをハンドアウトとして配付し、合わせて毎週の授業でのプレゼンテーションの担当テーマと順番を協議し、決定した。受講生が12名（正規登録11名＋聴講生1名）であったため、最終回のファイナル・プレゼンテーションを含め、計3回の発表をすることとした。

表1 「Global Issues Towards Peace B」 授業シラバス

	M	D	Themes & Presentors	Textbook Unit
1	6	12	Orientation (negative peace vs. positive peace & impact of wars)	
2			<b>Atomic Weapons: Hiroshima</b>	Unit 8
3		19	<b>Internment: Japanese Camps in North-America after Pearl Harbor</b>	Unit 7
4			Discussion and presentations on the above topic Presentation: ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	
5		26	<b>Education and Gender: Creating Opportunities for Learning</b>	Unit 1
6			Discussion and presentations on the above topic Presentation: ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	
7		30	<b>Landmines: Demining in Afghanistan and Cambodia</b>	Unit 10
8			Discussion and presentations on the above topic Presentation: ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	
9	7	3	<b>Refugees: Life in a Refugee Camp and International Refugee Law</b>	Unit 11
10			Discussion and presentations on the above topic Presentation: ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	
11		10	<b>Nobel Prize Laureates (1)</b>	Unit 12, 13, & 14
12			<b>Nobel Prize Laureates (2)</b>	
13		24	Discussion and presentations on the above topic Presentation: ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	
14			( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	
15		31	Final presentation:	
16			<b>"Making the world a better and peaceful place to live in "</b> (Using Power Point slides and giving a talk for 5 to 10 minutes)	

## 4.2. 授業の展開方法

毎週の授業では、2コマ連続（90分×2）のターム科目であるため、1コマ目にはテキスト、付属DVDを使って、その時間に扱うテーマ（話題）に関する基本知識や問題意識を醸成し、3グループに分かれて教員が準備した2～3個のDiscussion Questionsについて討論した。（Discussion Questionsの提示スライド例についてはAppendixを参照。）その後、休息を挟み、指定された学生がPower Pointスライドを使って3～5分のプレゼンテーションを行い、他の学生は質問や意見などを述べた。これらを通して、学生がグローバルな話題や平和に関わる諸課題について、基本的な事柄を理解し、発信・議論するための英語力を養うことを目指した。

なお、筆者と同じ外国語教育研究センターに所属する（英語母語）教員は「Global Issues Towards Peace A」を、異なる時間帯に新規開設・提供をした。もちろん使用言語は英語で受講学生数は20人であった。

## 5. 受講学生の情報

受講生は正規登録学生11名と聴講生（大学院生）1名の合計12名であった。授業の中では、正規登録学生と聴講生は、全く同じように参加し、プレゼンテーションやレポート課題などにも取り組んだ。しかしながら、本稿のデータ分析や考察は正規登録学生11名のみを対象にすることとした。表2は受講学生の専攻、表3は学生の英語力に関する情報（TOEIC®スコア）である。

表2 「Global Issues Towards Peace B」受講生の専攻

工学部第三類（化学・バイオ・プロセス系）	2
工学部第四類（建設・環境系）	1
教育学部第二類（科学文化教育系）技術・情報系コース	1
教育学部第三類（言語文化教育系）英語文化系コース	4
教育学部第三類（言語文化教育系）日本語教育系コース	1
教育学部第四類（生涯活動教育系）人間生活系コース	1
教育学部第四類（生涯活動教育系）造形芸術系コース	1
合計	11

表3 「Global Issues Towards Peace B」受講生の英語力（TOEIC® スコア）

	性別	Listening	Reading	Total
1	M	225	235	460
2	F	310	255	565
3	F	320	255	575
4	F	340	250	590
5	M	285	335	620
6	F	340	345	685
7	M	400	365	765
8	F	420	400	820
9	F	435	405	840
10	M	420	455	875
11	F	480	450	930
	Ave.	361.4	340.9	702.3

この授業は全学に対して開講されているが、2017年度に受講学生が2学部のみとなったのは時間割上の制約があったためである。（他学部生は別の必須科目を履修しなければならなかった。）また、筆者の主観的な受け止めを含むが、日本語でも同様の科目を履修することができる中で、敢えて英語で学ぶ同科目を履修する学生はかなりモチベーションが高いと言える。また、履修学生のTOEIC®スコア平均点は702.3であり、英語力は概ねCEFRのB2レベルである。

## 6. 受講学生の受け止め

### 6.1. アンケートの概要について

この授業の最終日に、受講学生全員が“Making the world a better and peaceful place to live in”というテーマの下、各自が自由にタイトルを付けてファイナル・プレゼンテーションを行い、その後「授業改善アンケート」に回答をした。学生に責任ある回答をして欲しかったので記名をさせたが、成績評価には一切影響はない旨を伝えた。アンケート項目1.～17.は以下の通りで、回答は5件法を用い、準備したマークカードに記入させた。

5 強くそう思う	Strongly agree
4 そう思う	Agree
3 どちらともいえない	Neither agree nor disagree
2 そう思わない	Disagree
1 全くそう思わない	Strongly disagree

（学生自身に関する質問）

#### 1. 質問や発言などにより、授業に積極的に参加しましたか。

You actively participated in the course by asking questions and making remarks.

（教育内容等に関する質問）

#### 2. 授業の進め方はシラバスに沿っていましたか（授業の進展に応じた変更を含む）。

The actual contents in the lessons corresponded to those in the syllabus.



3. 教員の説明は分かり易く、理解を深めることに役立ちましたか。

The teacher's explanations in the lectures were easy to follow and deepened your understanding of the contents of the course.

4. 補助教材やレジュメなどの資料(PowerPoint 等を含む)は、授業内容の理解に役立ちましたか。

The course materials, including the teaching aids and handouts, were well-devised and helped you understand the contents in the course.

5. 学生同士や教員と議論したりプレゼンテーションをしたりする機会がありましたか。

There were many opportunities to discuss with other students/the teacher and to make presentations in class.

6. この授業から知識などを身に付けることができましたか。

You learned academic knowledge and skills in the course.

7. 授業から知的な刺激を受けて、その分野や関連分野のことをもっと知りたいと思いましたか。

You were motivated to promote, and you want to know the field and the associated field more.

(教育方法に関する質問)

8. 英語での「平和科目」を受講したことは、自分にとって有意義でしたか。

It was useful for me to take a "Peace" subject conducted in English.

9. 教員の英語での授業提供はどれくらい理解できましたか？(教育方法に関する質問)

How much course content did you follow in English?

10. 英語でのプレゼンテーションは楽しく取り組みましたか。(教育方法に関する質問)

It was very useful form me to prepare a presentation in English and enjoy it.

(具体的な「テーマ(話題)」に関する質問)

以下は取り扱ったそれぞれのテーマ(話題)は、興味深く、適切であったと思いますか？

The theme/topic we worked on was interesting and appropriate.

11. Atomic Weapons: Hiroshima 核兵器

12. Internment: Japanese Camps in North-America after Pearl Harbor 日本人強制収容所

13. Education and Gender: Creating Opportunities for Learning 教育とジェンダー

14. Landmines: Demining in Afghanistan and Cambodia 地雷撤去

15. Refugees: Life in a Refugee Camp and International Refugee Law 難民

16. Nobel Prize Laureates ノーベル平和賞受賞者・団体

(総合)

17. 総合的に判断して、この授業に満足しましたか。

Overall, you were satisfied with the course.

これに続き、以下の質問に対して「自由記述」で感想を求めた。

18. 授業の方法や取り組みで、良いと思ったことを書いてください。(自由記述、別に用意されたファイルにタイプ入力してください。【記述式 200 文字程度以内】)

Please write what you thought to be good methods and activities utilized in the course. (Please write in Japanese.)

19. 授業の方法や取り組みで、改善すべきと思ったことを書いてください。（自由記述、別に用意されたファイルにタイプ入力してください。）【記述式 200 文字程度以内】

Please give recommendations for improving the methods and activities of the course. (Please write in Japanese.)

## 6.2 アンケートの結果と考察

### 6.2.1 選択方式で回答した項目について

以下に示す表 4 が受講学生の回答結果である。表 5 はそれらの分布状況を示し、図 2 はその情報をより分かり易くするために視覚化したものである。なお、表 4 に示す学生識別記号(a~k)は、上記の表 3 (1~11) とは異なる。

表 4 学生による授業評価アンケートの回答結果及び英語力

T	学生	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17	平均
590	a	3	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4.88
685	b	4	4	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	4	5	4.76
460	c	3	4	4	4	5	4	2	4	3	3	3	4	4	4	3	4	4	3.65
620	d	4	4	5	5	5	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4.76
840	e	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.00
575	f	5	4	4	4	5	4	4	5	4	5	3	4	5	3	3	5	5	4.24
820	g	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4.94
765	h	3	5	5	5	5	5	4	5	4	4	4	3	4	4	4	5	5	4.35
930	i	4	4	5	4	5	5	4	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4.24
565	j	3	4	2	2	4	4	3	4	3	2	2	2	2	2	2	1	2	2.59
875	k	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	未回答	5	4.88
702.3	平均	3.91	4.45	4.55	4.36	4.91	4.73	4.18	4.82	4.18	4.36	4.18	4.18	4.45	4.27	4.18	4.30	4.55	4.39

表 5 学生による授業評価アンケートの回答集計

回答	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
2	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1	1	1	0	1
3	4	0	0	0	0	0	1	0	2	1	2	1	0	1	2	0	0
4	4	6	2	4	1	3	4	2	5	2	2	4	3	3	2	3	2
5	3	5	8	6	10	8	5	9	4	7	6	5	7	6	6	6	8

11 人の受講学生全体の評価は 4.39 とかなり高いものであり、教授者としては大変嬉しく思う。しかしながら、一人の学生 j の平均評価は 2.29 であり、質問 17 の総合評価も「そう思わない」と否定的な回答（満足度）をしている。後で触れるが、この学生はもっと自由な討論の時間を確保して欲しかったようである。教育者として授業方法の改善点（課題）として謙虚に受け止めた。学生自身に関する質問 1 の平均値だけ 4 点を下回った（3.91）。この授業では英語での質問や発言が求められ、このことに慣れていないことが影響しているように感じる。「教育内容」「教育方法」に関する評価の平均値はすべて 4 点を上回り、学生は肯定的な受け止めをしたと考えられる。とりわけ、問 8「英語での『平和科目』を受講したことは、自分にとって有意義でしたか」については、9 人が「強くそう思う」残り 2 人が「そう思う」と回答しており、ツールとして英語で展開した授業は全ての学生にとって有意義であったと考える。また、具体的な「テーマ（話題）」に関する質問（問 11～問 16）も平均値が 4 点を上回り、学生個々による好みの違いは若干



あるものの、大学1年生第2タームの「平和科目」授業で扱うテーマ（話題）としては概ね適切であったと考えて良いだろう。さらに、コース全体の総合評価については、1人を除いて肯定的評価（平均値4.55）であった。何故この学生が総合的に判断して本授業に満足しなかったのかについては明確ではないが、教授者としてはこの事実は真摯に受け止めておきたい。

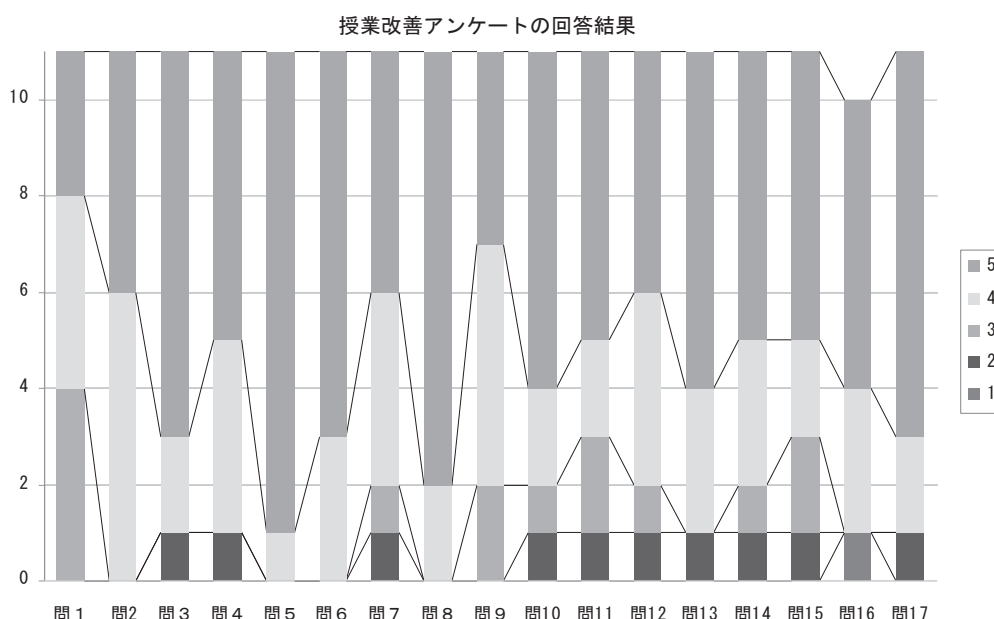


図2 学生による授業改善アンケートの回答分布

また、受講学生の回答傾向を探るために相関関係を見てみた。最初に述べておきたいことは、学生の英語力と授業全体の満足度にはあまり強い相関はなかったということである ( $r = .300$ )。英語で提供・展開する授業であるので、英語力がまだ十分に身につけていない学生が満足できないという事態は絶対に避けたかった。両者に相関があまりなかったということは、教育内容や方法も含め、コース運営がある程度機能したと捉えて良いだろう。問3「教員の説明は分かり易く、理解を深めることに役立ちましたか」と問10「英語でのプレゼンテーションは楽しく取り組みましたか」に関して、他の質問項目とかなり強い相関が見られた。つまり、この種の授業では、教授者が分かり易い説明を心掛け、学生の理解を深めることが肝要であり、コース・タスクとして課するプレゼンテーションも楽しく取り組めるような工夫が必要であると言えよう。ただ、アンケート回答者（＝受講学生）が11人しかいなかったため、これ以上の量的な考察は控えたい。

表6 学生の英語力及び授業評価アンケートの回答の相関関係

	TOEIC	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q17
TOEIC Pearson の相関係数	1	.484	.476	.549	.271	.299	.713*	.616*	.616*	.608*	.387	.300
有意確率 (両側)		.132	.139	.080	.421	.372	.014	.044	.044	.047	.239	.371
N	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
Q1 Pearson の相関係数		1	.105	.328	.177	.363	.187	.513	.541	.510	.628*	.457
有意確率 (両側)			.759	.325	.602	.273	.581	.107	.086	.109	.038	.158
N		11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
Q2 Pearson の相関係数			1	.466	.452	.289	.559	.603*	.430	.788**	.407	.466
有意確率 (両側)				.149	.163	.389	.074	.050	.186	.004	.214	.149
N			11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
Q3 Pearson の相関係数				1	.905**	.904**	.833**	.644*	.818**	.700*	.815**	.885**
有意確率 (両側)					.000	.000	.001	.032	.002	.016	.002	.000
N				11	11	11	11	11	11	11	11	11
Q4 Pearson の相関係数					1	.848**	.716*	.581	.729*	.616*	.795**	.905**
有意確率 (両側)						.001	.013	.061	.011	.044	.003	.000
N					11	11	11	11	11	11	11	11
Q5 Pearson の相関係数						1	.516	.399	.671*	.522	.763**	.904**
有意確率 (両側)							.104	.224	.024	.099	.006	.000
N						11	11	11	11	11	11	11
Q6 Pearson の相関係数							1	.773**	.770**	.726*	.644*	.604*
有意確率 (両側)								.005	.006	.011	.032	.049
N							11	11	11	11	11	11
Q7 Pearson の相関係数								1	.847**	.900**	.821**	.644*
有意確率 (両側)									.001	.000	.002	.032
N								11	11	11	11	11
Q8 Pearson の相関係数									1	.778**	.897**	.818**
有意確率 (両側)										.005	.000	.002
N									11	11	11	11
Q9 Pearson の相関係数										1	.814**	.700*
有意確率 (両側)											.002	.016
N										11	11	11
Q10 Pearson の相関係数											1	.919**
有意確率 (両側)												.000
N											11	11
Q17 Pearson の相関係数												1
有意確率 (両側)												
N												11

$p < 0.05$  \* (両側),  $p < 0.01$  \*\* (両側)

## 6.2.2 自由記述方式で回答した項目について

次年度以降の教育内容や授業改善に生かしたいと考え、受講学生に率直な感想（受け止め）を記述してもらった。なお、引用後の丸カッコ内のアルファベットは、筆者が任意に割り振ったもので表4と一致させてある。（引用は代表的なものを掲載し、字句の誤り訂正以外は原文のままである。）

### 6.2.2.1 「18. 授業の方法や取り組みで、良いと思ったことを書いてください」について

まず、授業方法についての肯定的なコメントをまとめてみたい。この科目は全てを英語で行うということが一番の特徴であったので、まずはそれについて見てみたい。学生の11人中7人が、この英語で行う授業を評価していた。（7人）

- b すべての英語で行われる授業は、自分の英語力を伸ばすためにも、そのトピックに取り組むための入り口としてもとても刺激的でした。
- d 全て英語で授業を行うという授業形態が良かった。確かに、理解が追い付かず大変な時もあったが、自分の英語力を高めるにはうってつけの講座だと思う。
- g 唯一英語を好きにだけ話せる授業だったのでとても貴重な時間でした。

- h 英語で討論やプレゼンテーションをするのは、大学らしい授業形態で、今まで経験したことなかった、人前で発表するというのを伸ばす良いきっかけになったと思った。
- k すべての授業が英語で進行されたこと、特に他の生徒たちと英語でディスカッションを行う機会が準備されていたことは大変良かったと思う。

また、英語で意思疎通することの難しさを述べた学生もいた。

- a 自分の思いを英語で発表することの難しさを痛感したいい機会になった。

次に、グループ・ディスカッションを評価する記述も半数近く見られた。(5人)

- a この授業は毎回必ず一度はグループ・ディスカッションを取り入れていて、大変有意義な授業だった
- b ディスカッション重視の授業でしたので、自分の意見に責任を持たないといけないことも学ぶことができました。
- i 人数が少なかったこともあり、皆に発言する機会があったことです。今までの平和教育といえは、教師が教壇に立って、彼の意見を提示するというのが一般的であったが、今回の平和科目では各々が各々の経験を交えて意見を述べ合うことができたのも良かったです。

そして、プレゼンテーションを評価する記述も多く見られた。(7人)

- b 自分にとって最もよかったのは、プレゼンテーションです。英語を恥ずかしがらずに話すことはできるようになったと思います。すごくいい経験でした。つぎは英語を母語とする人たちの前でプレゼンテーションをしてみたいです。
- c パワーポイント作成はパワーポイントを作る練習にもなりいろいろ参考になった。
- d 英語でプレゼンテーションをさせるのも良かった。日本語でするよりも労力を要し、時間もかかるが、確実に自分の力になっていると感じた。
- g 自らの自由な発想力で自分なりのプレゼンテーションをさせていただけたのが自分自身型にとらわれない方法で表現できていろいろな面で成長できたのでよかったと思います。
- k 合計3回のプレゼンテーションを通じ、英語を用いて情報を収集すること、英語を用いて簡単な情報や自分の考えを全体に向け発表することができ、大変良い機会となった。

さらに、協働学習やクラスの雰囲気人评价する記述も多かった。(6人)

- a 自分はほかのメンバーと比べてはるかに英語で発表する能力が欠けていたが、みなにやさしくサポートしていただき非常に楽しい授業だった。
- f 複数の生徒が1つのテーマについてプレゼンすることで、いろいろな角度からそのテーマについて考えることができる点が、良いと思いました。
- g 他の人のプレゼンテーションから刺激を受けることも多く一番充実していたと思える授業でした。
- i 新たな視点に気づくことができたのも双方にとって利益があると思います。
- j 発言する機会や、教員やほかの学生との関わりが多かったこと。

最後に、授業で扱った内容については、平和に関わるグローバルな諸課題を考えることができたとのコメントがあった。(2人)

- d 他の平和科目よりも確実に有意義で、素晴らしい講座だと思う。もっとたくさんの人に受けてもらいたい。
- h 小学校から高校まで平和教育という危機や平和に対して真剣に向き合ったことがなかった。しかし、広島というフィールドで、平和に関する専門的な内容を英語で学ぶことができ、知見や教養を伸ばす機会になったと感じる。

これらのコメントは本コースの目指したものが履修学生が支持されたと捉えても良いと考える。

#### 5.2.2.2 「19. 授業の方法や取り組みで、改善すべきと思ったことを書いてください」について

次年度へ向けて、学生から指摘された課題を報告したい。まず、使用言語については以下のよう指摘があった。

- k 英語を用いた授業ということで基本的に英語が用いられた。だが一方で取り扱う内容が平和に関した内容であり時には非常に複雑な英語を用いることになった。すべての生徒がその内容を英語で表現することは難しく、特にプレゼンの発表後の質疑応答で回答に詰まってしまうことがあった。その場合、平和に関する理解を深めていく、あるいは様々な意見に触れるという目的のもと、例外的に日本語の使用を認めることも必要なかな、と思いました。

これをどう受け止めるかは意見が分かれるところである。この学生自身の英語力は非常に高いが、他のクラスメートの授業参加の様子を見ての的確な(客観的な)指摘かも知れない。扱う内容の難易度なども含めて検討してみたい。

次に、教授者自身も感じてはいたが、グループ・ディスカッション時の時間確保が十分にできなかった。次年度は是非とも工夫して、ディスカッションにより多くの時間を確保するように努めたい。

- e プレゼンテーションをする人数が多いときはディスカッションの時間があまり取れなかった。
- f 小さいグループになって1つのトピックについて話し合う場面で、その後発表する時までの時間が少なかった。もう少し考えをまとめる時間が欲しいと思いました。
- j プレゼンが多すぎる。(筆者の追記：おそらくはもっとディスカッションがしたいという意味であろう。)

また、ディスカッションの際のグループ分けについてのコメントもあった。これについては、次年度以降は新学科(総合科学部国際共創学科、定員40名)の必修科目に指定されているので、毎回メンバーが変わるように工夫をしたい。

- a グループでディスカッションをする際に少し人数が少なかったので毎回同じ人同士と話すといった感じに必然的になってしまったのでこのクラスの人数を少しだけ増やしてみてもいいと感じた。しかし人数が少ないとそれだけメンバーと仲良くなれた気がするの  
で、少人数ならではの良さもないわけではないとも思った。

さらには、プレゼンテーションの理解を促進するための提言もあった。

- i 初めのころ、プレゼンテーションの際の質問やコメントが少なかったのが残念でした。  
プレゼンテーションを聞くときにどんな面に注目するかなどを示したプリントなどをは  
じめのほうの授業で配布できたらいいのではないかと思います

最後に、扱うトピックや内容については以下のような内容があった。謙虚に受け止めたい。

- c 内容が結構制限されていて、もっと幅広い範囲をできたらよりよくなると思った。
- j 教科書の学習で、教科書の内容の理解までに至らなかったこと。

## 7. まとめ

本稿の目的は、広島大学で2017年度に新規開設・提供した「英語による『平和科目』Global Issues Towards Peace B」のコース内容を紹介し、受講学生の受け止め(評価)を報告することであつた。筆者の専門領域は「英語教育学」であり、「平和学」や「国際政治」「国際関係論」などではないので、頭書筆者がこのような授業科目を担当しても良いものかと迷ったのも事実であつた。ただ、CLILの取り組みが日本の英語教育界で広まったこと、また「平和科目」は勤務する広島大学全体としての取り組みであり、さらには「平和」は万人が考えるべき事柄であると考えて、授業提供をするに至った。それ故、この点を初回授業で受講学生にきちんと説明し(もちろん英語で)、彼らからの理解を得るとともに、共に学び考えたいという姿勢を示した。このことが結果としては功を奏したのかも知れない。次年度以降は、受講学生が50人を超えることが予想されるので、学生に満足感を与えられる授業内容と方法を新たに構築する必要がある。この取り組みについては、稿を改めて報告したい。最後にある受講学生の自由記述にあったコメントを紹介し、結びのことばとしたい。

- h 広島大学としても初めての試みで、かなり挑戦的な授業だ。今までとは異なった授業形態で指導教員も試行錯誤していると感じる。それゆえ、授業の方法や取り組みに関して、改善すべき点はないと思う。私たちの授業の経験をもとに、次の代の参考にしていてもらいたい。

## 参考文献

- 笹島茂(2003).「学術的な目的のための英語(English for Academic Purposes: EAP)」『応用言語学事典』小池生夫(編)研究社. 105-106.
- 笹島茂(編著)(2011).『新しい発想の授業ー理科や歴史を外国語で教える！？』三修社.
- 総務省(2017).『グローバル人材育成の推進に関する政策評価書(平成29年7月)』.
- 達川奎三, Walter Davies, 田頭憲二, 山本五郎, 田北冬子(2014).『Global Issues Towards Peace: DVDで学ぶ共存社会ーグローバル時代を考える』南雲堂.

寺内一 (2000). 「ESP とは何か」『ESP の理論と実践：これで日本の英語教育が変わる』 深山 晶子 (編) 三修社 . 9-32.

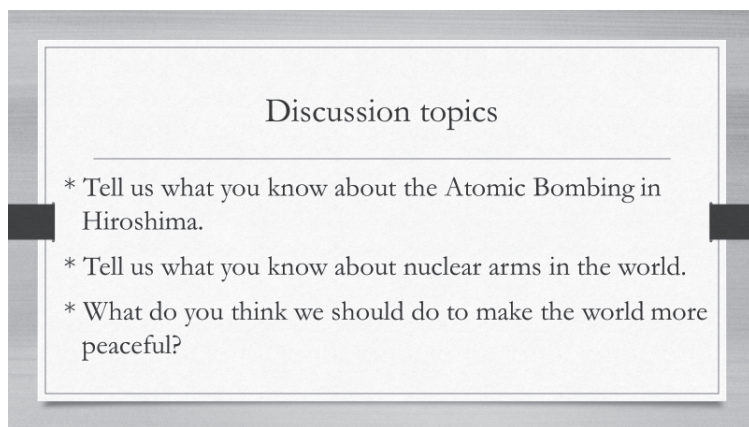
中谷安男 (2016). 『大学生のためのアカデミック英文ライティング検定試験対策から英文論文執筆まで』 大修館書店.

文部科学省 (2008). 『グローバル人材の育成について』 (産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会資料 2, 2010 年 4 月).

「第 2 特集 グローバル教育を意識した高校授業」『英語教育』 65(5). 2016 年 8 月号. 34-39.

### 【Appendix】授業で扱った Discussion Questions の例

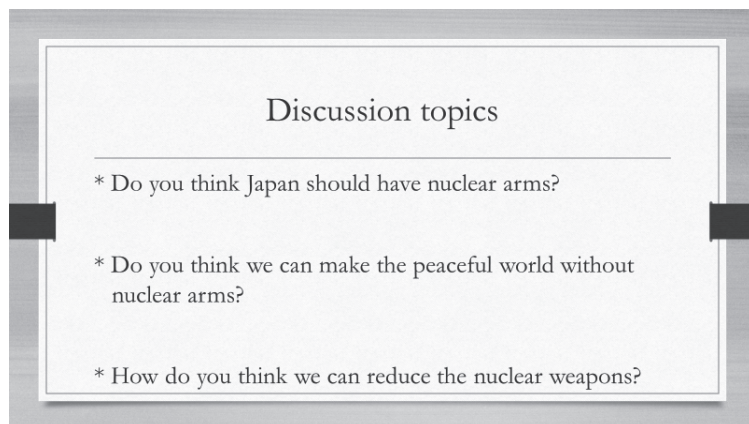
Unit 8: Atomic Weapons 核兵器 (その 1)



Discussion topics

- \* Tell us what you know about the Atomic Bombing in Hiroshima.
- \* Tell us what you know about nuclear arms in the world.
- \* What do you think we should do to make the world more peaceful?

Unit 8: Atomic Weapons 核兵器 (その 2)



Discussion topics

- \* Do you think Japan should have nuclear arms?
- \* Do you think we can make the peaceful world without nuclear arms?
- \* How do you think we can reduce the nuclear weapons?



Unit 1: Education and Gender 教育とジェンダー

### Discussion topics

\*Some people think that girls should prepare for becoming good wives and smart mothers rather than study at college. Do you agree with this?

\*Do you think that girls in Japan have equal opportunities to study, compared with boys?

Unit 11: Refugees 難民

### Discussion Topics

\*Do you think the number of refugees will increase in the future? Why (not)?

\*Do you think the number of refugees and asylum-seekers in Japan will increase in the future? Give reasons.

\*Imagine you were forced to leave your hometown due to some life-threatening problem such as armed conflict or natural disaster. Where would you choose to go?

Unit 12: Nelson Mandela ネルソン・マンデラ

## Apartheid

“ No one is born hating another person because of the colour of his skin, or his background, or his religion. People must learn to hate, and if they can learn to hate, they can be taught to love, for love comes more naturally to the human heart than its opposite.”

## ABSTRACT

### **Providing a Liberal Arts Peace Studies Course in English at a Japanese University**

Keiso TATSUKAWA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

The purpose of this paper is to describe a Peace Studies course in Liberal Arts education taught and learned in English at a Japanese university and also to examine the results of students' course evaluation. An increasing number of universities all over the world provide courses in which students can get credits and complete their degrees by only taking the subjects taught in English. At Hiroshima University, all the first-year students take a peace studies course as one of their compulsory subjects. The university needs to provide some of those courses in English for international students and those Japanese students who are interested in studying abroad. "Global Issues Towards Peace B" is one of those subjects. The course was conducted in English by a Japanese English teacher (the author) and 11 students took it in 2017. They met eight times for the course in the second term and they learned various important global issues to create a more peaceful and better world. Every week they had a group discussion of four people, and several appointed students prepared and gave their presentations with Power Point slides. At the end of the course, the students worked on the course evaluation questionnaire and wrote some comments on the course. It has been found that almost all of them were very satisfied with the course. Two major reasons were that it was conducted in English, and that the pedagogic tasks were stimulating.